

二年・三年保育

五歳児の一学期に臨んで



永 山 暁 美

(一) 年長組になつて

春休みを終えて、登園してきた五歳児は、心なしか背丈までぐんと伸びたのではないかと思われるほど、何と大きく生き生きとして、自信に満ちて見えることでしょう。夢みるような新入園児が傍にすることも手伝って、新しい年長児たちは、あいさつも自分から進んではっきりといえ、動作もてきばきと要領よくすることができ、幼稚園生活の約束もよく守られ、各自が、自分で選んで決めた行動を、いとも楽しげにくりひろげております。

この幼児たちは、ついこの間まで、足どりも幼さが残り、何をするのにも、ゆったりと、幼稚園生活をしているような四歳児だったのに、一夜で双葉がばつと開くように、もうすっかり力のみなぎった、頼もしげな年長組の園児になりきっています。

私たちは、こういう思いを以前に何度も味わったことを思い出しながら、なお、新しく、目の前の五歳児の成長ぶりに驚かざるを得ないのです。そこでまた、教師たる私たちが、これについていくだけの心の準備ができていくかどうかと、反省させられると共に、「さあ、この子どもたちと、この一年間、ベストをつくしてがんばるのだ」という意欲がわいてきます。まさに、私たちの活動の原動力はこの幼児たちにあることを、教えられます。

四歳児組から、五歳児組へ、引き続き担任する者として、これからの二年間を展望するとき、去る三月、卒業式の日、園長先生から一人一人お免状をいただいて、晴ればれとした表情で壇を降りてきた、卒業の園児たちの顔を、次々と思ひ浮かべます。この幼児たちの、そこまで成長する過程を、どのようにに経験させ、指導していったらよいかと、思ひ悩んでしまします。

四歳児時代から培ってきた、集団生活になじみ、よい生活習慣を身につけ、社会人としての基礎を身につけることを、いっそう確かなものにすると共に、ますます健康で、運動能力も増し、敏捷性をもつ身体を、作っていききたいと思ひます。その上で、自分のことは自分で判断し、処理することができる自立心と、自分の興味に流されず、他人の迷惑も省みることのできる自制心を持ち、さらに進んで、他人のために役立つことを喜んでする、豊かな人間性を持った幼児に、育てていききたいと思ひます。

さらに、年長児として、自分の仲間を大切にし、その中でこのびびと自分を表現できるように、また、広く社会や、周囲の事象に関心を持ち、それについて、見たり、考えたり、表現したりする能力を持つように、できるだけさまざまな経験^{きんげん}をさせてやりたいと思ひます。そして、経験の場に臨んでは、常に意欲をもつて何ものかを感じとり、発見することのできる、生き生きとした心

を持ち、最後までやり遂げる^{ねばり強さ}のある態度を、養っていききたいと考えています。

終わりに、五歳児の指導における大切なことの一つとして、自分の考えをはっきりと発表できることと同時に、他人の意見をも尊重することができ、また、他人の話をきく時には、耳を傾けてよく聞く^{きく}という態度を、機会あるごとに身につけさせていききたいと思ひます。そして、話を正しく理解して自分のものにし、それに反応する力を養っていくように、よりよい指導を研究していかなければならないと思ひます。

(二) こうした幼児像を考えながら、教育計画を実践する

に当たって

これまでさまざまな角度から考えてきた、五歳児のあるべき姿を実践の場にうつすに当たって、いかなる環境を準備し、いかなる指導案をたてていったらよいかを種々な資料や、当園の教育課程を基として、研究することが大切なことであると思ひます。次には、教師間でそれを検討しあい、力をあわせて、現実の幼児にあった、この幼稚園独自の教育計画をたてていかなければなりません。

この教育計画を実践する第一歩は、これまでの幼稚園生活で身

につけた基礎の上に立って、それぞれの目標へ方向づけるための、日常のなにげなく見える経験の積み重ねが、何より大切なこととなります。目標に向かって、幼児と教師が、次第に築きあげていったものを、ある場合には幼児の側から自然発生的に、ある場合には教師の意図による刺激を受けた箇所から、種々の自発活動が生まれ、発展していきます。その時によって、グループだけの活動に終わることもあれば、時には、グループ活動が互いに結びついて、級全体が参加する大きな活動へ、展開していくこともあります。また、ある時には全く予想しなかった形によって始められ、発展をしていったために、教師の予想外の教育効果があることもあり、また、その反対の場合もあるということを何度か経験しています。

幼稚園における教育計画は、幼児が自ら発見し、選択することによって始められ、幼児の心の動きが行動になって現われ、展開されてこそ意味があるものですから、さまざまな形になることは、当然のことだといえると思います。

このように教育計画実践の場は、未知なものに包まれ、しかも果てしない可能性をもつ幼児のためのものなのです。そこで私たちはいつも、教師一年生になったつもりで、日々、新たな心を持ち、今までの経験を基礎参考にして、真剣な努力を重ねていかな

ければならないと、折あるごとに、自ら戒めております。

加えて、この幼児たちは、世界から宇宙へと、日に日に進歩し、拡大していく未来に生きる人間であることを常に考えの中において、教師も、現代社会の息吹きと科学の進歩を、一生懸命勉強していかねばならないと思います。

(三) 一学期の展開

(1) 一学期の五歳児

外見はぐんと成長した五歳児は、毎日がいかにも楽しそうに自信に満ちています。しかし、幾日かをその活気ある集団の中に身をおいてみると、一人一人の個性の差、心身の成長の差は実にさまざまであることを感じさせられます。私たちは、その個人差が、生まれ月によるものか、家庭環境によるものか、生活態度によるものか、能力によるものかと、三歳児、四歳児、五歳児と、成長してきた過程をふりかえってみて、改めて検討しなければなりません。

その手がかりの一つとして、年度の終わりに記録した指導要録を、もう一度読み返して、目の前の幼児と照らし合わせてみる必要があります。その上で、一人一人について一学期間をどの方面に力を入れて、どのような指導をしていったらよいかに

ついでに計画をたて、その幼児の自然の発達とにらみ合わせながら、あせらずに一步一步成長させていきたいと思ひます。

また、級全体を見わたしてみると、この頃の五歳児は、何でも知ろう、やってみようという行動の時期で、教師に対して物心の要求が絶えません。そこで、各種の図鑑や地図や画報を用意したり、大小の空箱や空びん、端布や毛糸や糸巻、木片や針金まで、手近な所に蓄えておくのですが、それでも足りないと思うことがしばしばあります。しかし以前に比べると、マジックインキ、セロテープ、ボンド、プラスチックやビニール製品など、幼児にも扱い易い、便利な材料が普及したので大へんにありがたく、嬉しいことだと思ひます。

五歳児の行動は、ほとんどグループによって行なわれていますが、虫がねと一匹の虫の間において、頭を寄せて図鑑を調べるというような姿から、十数名に及ぶグループ遊びまで、いろいろな活動を展開していますが、この頃にはまだ、自己主張が多く見受けられます。せつかく、大きく伸ばした羽を、上手にはばたけないような時、教師の助言や、参加が必要なことも、おこつてきます。

また友だち同士、相手の行動を尊重すると共に、違ったことは互いに教えあつて、皆が正しい行動をとれるように、楽しい

社会を作っていく力も、伸ばしていきたいと思ひます。

一学期の自然は幼児の活動を誘うように、暖かく爽やかで、衣服も軽くなり、幼児たちは色とりどりの花が咲く花壇や草原の間をとびまわり、大好きな虫たちと、夢中になって遊んでいます。

「お花がいたくないように、そつと摘んであげたのよ」とたんぽぽや、しろつめ草を抱えてきたり、「たくさん遊んだから、この虫をもとのお家に帰してあげよう」などと、幼児たちの情緒も、豊かに育ってくれる楽しい季節です。

(2) 一学期の行事から

〔四月〕

(対面式)

年長組になったことを自覚するよい機会で、新しいお友だちに、歌やリズムや楽隊あそびなどを見せてあげたり、喜びそうなものを製作して、贈ってあげています。

この頃は、すすんで、いろいろなことを世話してあげたり、教えてあげたいという気持ちがいっぱいなので、誰もが喜んでこの活動に参加しています。

(各種の定期検診、毎月の発育測定)

体を清潔にし、衣類に記名するように、前もって家庭へ連

絡し、幼稚園でも、それらのことについて話し合いをしておくと、自分や友だちの健康や成長に関心をもって、すすんで受けるようになります。衣服の脱着や始末は自分で手早くし、後ろ開きなどでできないところは、友だち同士が手伝いあうようにします。

こういう機会に、背の順の他に、生まれ順も覚えておくと、都合がよいことがあります。

(お誕生会：毎月の終わり頃、各級で行なう)

毎月の始めに、その月に生まれたお友だちにあげる、絵や、手紙や、製作をして絵本などにし、贈り物を作っておきます。

当日はお誕生会を始める前に、相談をしてプログラムを作りその日のお当番になった二人が司会をします。教師は幼児たちの中に入っていっしょに楽しむようにし、時々、歌の伴奏やダンスの曲を弾いたり、会の進行を助ける役をしています。

友だちのお誕生日を祝ってあげるとともに、自分の時のことを大そう期待して、待ち遠しがっているようです。

この会を重ねるたびに、贈り物やプログラムの内容も、会の進行も、充実していくのがよく分かります。

〔五月〕

(子どもの日)

四月の終わり頃から、園庭に鯉のぼりの大小新旧をずらりとあげて、矢車のまわる音をききながら、藤の花のゆれる姿と、高い空の青さをともに見上げます。風が吹く時は、一斉に空を泳ぎますが、ふだんは、皆、尾を地面に向けて、いかにもつまらなそうに垂れ下がっています。そのようすを絵に描いた五歳児があり、竿にそって、幾つもの鯉が重ねて描かれてあり、鯉のぼりの目は、細くねむっているように見えました。そのうち幼児たちも、模造紙や包装紙などで、自由に鯉のぼりを作り始めます。また、協同で大きな鯉のぼりを作って、庭の電信柱や遊円塔にたてにいくこともあります。

遊戯室には武者人形や供物を飾っておきますが、たいてい、何組かの園児が見にきていて、ますますその由来などを尋ねられます。昔話に花をさかしていると、「この子どもたちは、やっぱり日本の伝統の中にも生きている」ことを感じさせられます。

子どもの日は休園なので、前日に歌をうたったり、お話をきいたり、皆でにこにこしながら柏餅を食べたりして、楽しく過ごし、自分で作った鯉のぼりを、家へ持って帰ります。

(遠足)

お菓子や海苔巻きや水筒を持って、友だちといっしょに遠足

にいくことは、幼児たちにとって、何よりも楽しい行事の一つです。遠足が決まって、その話をする時、一瞬、室中が歓声と笑顔に埋まります。年長組になると父兄の付添いなしで、園児と教師だけで、遠足にでかけます。それだけに、朝の健康状態への注意と、食物の持たせすぎ、忘れものなどのないように、家庭によく連絡をしておきます。

一人で参加するということは、自分で荷物を持ち、団体行動をとり、見学をしたり食事をしたりして、そのすべての後始末をするということで、遠足の一日は、緊張の連続であろうと思いやられます。しかし、幼児たちは誰の顔も生き生きとして、嬉しそうで満足しているように見受けられます。遠足には、いわゆる遊園地を避け、広々とした自然を見わたせる所を選びます。記念写真を撮ったり、水族館を見て歩いたり、坂を登ったり、池のほとりを散歩したり、芝生で転がったりしていると、常々ががんばりのない人から、「疲れたから、休もう」とか、「早く、お弁当にしましょう」とか、弱音をはいてくるのが決まっています、おかしいようです。

そのあとで芝生の上に、ビニールを敷いて座を作り、ぬれタオルで手を拭いてから、昼食をし、用意してきた屑入袋に、諸諸の屑を納めて、帰り支度を整えます。注意書きにもかかわら

ず、たいていの人は、お菓子や果物は、半分位しか食べられないで帰りの荷物となるようです。

幼稚園に帰って、無事にお迎えの父兄に引きつぐと、いろいろな意味で、貴重な経験をして来たことが、はっきり分かるような気がします。

〔六月〕

(ごっこ遊び)

この頃になると、登園後ひとしきり遊ぶと、机に坐って絵を描いたり、粘土をいじったり、何か製作することに興味を持つ人も出てきます。何か作りたくなったら、室の一郭にある材料置場から、適当なものを選んで使うことになっていますが、「こんなものはない？」と、いろいろな希望をもちだしてくるので、いっしょに行って、何とか希望にそえるようなものを探すこともよくあります。自由製作の時の約束で、スモックを着て絵具を使う、マジックインキは、ビニール布を敷いて使い、必ずすぐに蓋をする、セロテープなどは無駄をしないように使う、きりや小刀類は必ず教師の見ているところで使うなどを、よく守っているかどうか、時々室中を見まわさなければなりません。こういう活動に参加していない人の把握や、その生活態度にも注意が必要になります。

こうして、折々に作ったものがたまって、空中が賑やかになつてくるので、皆の中から「展覧会、ごっこをしよう」とか「売屋さんごっこをしよう」というふんい気になってきます。できたものを分類して、車、飛行機、手提げ、トランク、家、ロボット、人形、動物、花、機械、眼鏡や首飾りのような小間物などと分けて並べ、売屋さんごっこなら、皆で値段を相談してつきます。それから、準備や、開店までの係をきめ、ポスターや招待状をかいたり、引換券やおみやげ券を作り始めます。おみやげ用の首飾りやブローチやしおりや絵葉書などを作ることに一時専念しながら、お客さまにきていただく「開店の日」の相談をするのも、楽しいことの一つです。

その年によつては、時の記念日の話をきいて、昔からのいろいろな珍しい時計について調べてみたりして興味が出、「時計博覧会」を計画することもあります。紙片を代用した砂時計から、花や動物や玩具の形をとり入れた可愛い時計、ビルディングの上の大時計などが、次々に生まれてくるので、飾るふんい気に苦心がいります。

また、お人形や動物がたくさんできたので、舞台を作り、人形劇をして遊び、時には、隣の組にもお客さまに来ていただきたい、「劇場ごっこ」に発展することもあります。一学期の段階

では、お客さまに見てもらうよりは、やっている人が楽しむようなもので、これという筋がない、日常生活をうつした小品劇が多いのですが、毎日、誰かが楽屋にもぐりこんで人形を動かし、幾人かが客席に腰掛けて楽しんでいきます。

〔七月〕

(七夕まつり)

近頃は、家庭で七夕まつりを経験していない人が増えているので、幼稚園で、遠い昔からの七夕の情緒を味わいながら、星の物語をきいたり、リズムで遊んだり、笹飾りを作ったりするのも、よいことではないかと思えます。形や色どりを考えて、思い思いの飾りを作って笹につけ、自分の願いごとを短冊に託してお星さまに願ひするなど、お話の世界の夢に浸るのも楽しいことです。

一方、現在では、天体は私たちの生活と全く交渉のない夢の世界ではなくなつて、地球を離れて月への往復による新しい夢が誕生し、話題も果てしなくひろがっていくことでしょう。

七夕まつりと前後して、大学のホールを使って各級で一つ二つ簡単なリズムをして、一学期の終りを父兄と共に楽しみ、幼児たちの成長の一端を見ていただくという行事もあります。年

長組では、共通の目的に向かって皆で積極的に参加する意味で、級ごとに、劇あそび、楽隊あそび、フォークダンスなどをいたします。

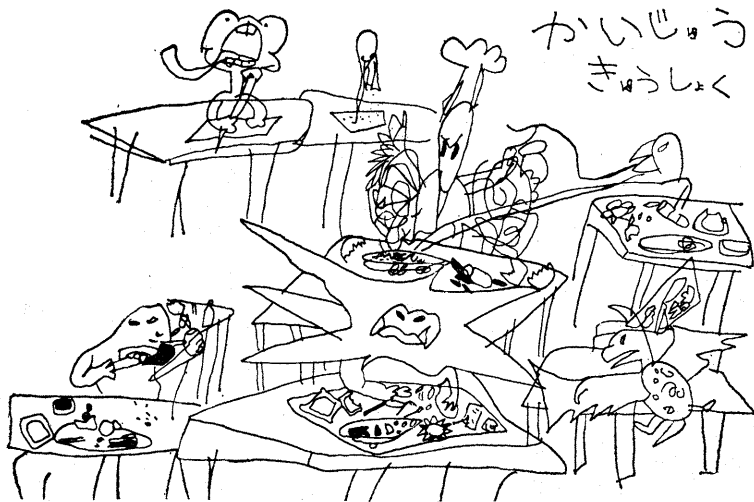
年少組の時に、何度か経験をしているので、広いステージを、上手に使いこなすことができ、新入園児との違いがよく現われてきます。

○七月下旬から、長い夏休みに入り、その間に、各自がさまざまな経験をすることになります。八月中に二、三回登園して、小学校と共有のプールで泳ぎます。水量を少なくし、好きなように泳ぎますが、五歳児の中には、まるで潜水艦のように水の中に潜りながらも、浮袋なしで泳げるようになる人が、二、三人は出てきます。

二学期を迎えると、日焼けして、いちだんとたくましくなった五歳児が見られることが楽しみです。

幼稚園生活の中で、最も充実し、大いに五歳児の力が発揮される二学期に備え、教師も夏休み中の計画をたて、講習会へ出席して研修をし、社会見学を心掛け、体力作りの時にしなければならぬと思います。

(洗足学園幼稚園)



怪獣給食 給食がはじまってまもなく、一年生のA君のかいた絵。給食については、家でなにも話さないが、絵の中のカイジューが、生き生きとA君の観察を伝えてくれる。手をのびて取る子、取られて手をふりまわす子、口のまわりにたべものをつけてむちゅうでたべてる子、どこかで見ただことがあるような顔だ。ことし幼稚園を出た子どもたちは、こんな世界に住んでいる。